石州和紙との出会い

筆者は日本国際交流基金の出資で、2006 年―2007 年約一年間、博士論文の資料収集のため日本に滞在していました。無形文化財としての和紙を論文テーマに書こうと思い、文献資料を調べ始め、島根県が昔からの和紙主要産地であり、有名な『紙漉重宝記』が石州和紙のことを詳細に紹介した重要な和紙関連の著作であることがわかりました。日本にいる間、文献資料を整理すると同時に現地調査のことも視野に入れました。幸いに、その時島根県立大学の市民研究員中政信先生に出会いました。中先生は和紙関連の重要な参考文献を教えてくださった上で、百万塔の中に納まった貴重な陀羅尼経の複写コレクションまで大学に持ってきてくださり、その写真を拙著の中にも採用させていただきました。

四種類の陀羅尼経

そして、中先生の紹介で指導教官の大橋敏博先生、中先生と 3 人で石州和紙技術者会のメンバーの石州和紙久保田を訪問し、久保田彰さんにインタービューを行いました。久保田彰さんは重要無形文化財石州和紙の認定書を出してくださり、石州和紙のことをいろいろ紹介してくださいました。石州和紙の話に触れると、自信・自慢さが自然的に久保田さんの言葉と表情に溢れました。工房を訪問した時、ちょうど技術者会元会長の久保田保一先生が逝去されて間もないのことだったので、筆者は先生のため丁寧にお線香を上げました。実を言うと、三隅における石正美術館で先生の講演を拝聴したことがあり、先生と一面のご縁があると言えます。先生が病気にかかっていたにもかかわらず講演され、筆者を含め聴講者みんなが涙が出て感動させられたことは今でも覚えております。

筆者（右一）と中先生（左一）、大橋先生（左三）は久保田工房を訪問

石州半紙は去年 9 月、中国の宣紙と同時にユネスコの無形文化遺産の代表的な一覧表に記載されました。和紙と宣紙は日本文化と中国文化だけでなく、全世界の文化の伝承にとって貴重な存在であると思い、これから伝統的な手すき紙に関する研究、保存及び活用が益々進められ、この分野における国際交流も益々盛んに行われていくと考えております。

皆さんのご支援ご指導のもとで、筆者の拙著『和紙の芸術――日本無形文化遺産』が無事に出版されました。皆さんとの出会い、石州和紙との出会いのことを以下のように本の中に綴らせていただきました。

筆者：石州和紙の特徴は何でしょうか？

久保田：最大の特徴は皮の青い部分を使用していることです。その他の和紙は黒い部分を削除して白い部分だけを使用しています。これに対して、我々は黒い部分と白い部分の間の青い部分も使用しています。これによって作った和紙は青みが感じられますが、その青みは長い時間がたつにつれてだんだん白く変わります。年代が長ければ長いほど自然に見えてくるのです。もうひとつ、石州和紙の強さです。石州和紙は以前大福帳にして使用されていましたが、今はよく文化財修復分野に使われています。福岡県の九州国立博物館は長期的に石州和紙を使用しており、紙質文化財の強さを高めるため、石州和紙は往々に一番下或いは中間の層に使用されているそうです。

筆者：石州和紙の歴史、現状を教えていただけるでしょうか。

久保田：石州和紙は長い歴史を持っています。18 世紀の末，ここの国東治兵衛は『紙漉重宝記』を書きました。彼は我々の誇りです。以前はここの山々にたくさんの楮の木が植えられており、漉き屋も多かったですが、今は少なくなりました。石州技術者会は今現在 6 人の会員、1 人の準会員となっています。

石州半紙技術者会は文化の伝承を重視し、海外との交流も積極的に行っています。1992 年、私は中国・北京に行われた「日本伝統工芸品展」に出展し、現場で実演したことがあります。その他、我々はアメリカ、ブータンの研修生の受け入れ、ブータンにおける紙漉き会館の建設などたくさんの実績を持っています。

和紙は芸術なので、もっと多くの人に知ってほしいです。

筆者は和紙の芸術をもっと多くの中国人に知ってほしいし、和紙分野における中日交流を進めるため力を尽くしていきたいと思っております。

ご期待願います。

馮　彤　(FENG TONG)
北京師範大学文学院　民俗学と社会発展研究所　ポストドクター
TEL:13601225949
E-mail:fengt23bluesky@yahoo.co.jp